

深川で掘り起こす



事業対象地域 東京都江東区深川地区

受託機関 特定非営利活動法人 横浜コミュニティデザイン・ラボ

1

事業内容

実施目的

新規創業者候補に対して、スタートアップを迅速に行う仕組みをつくる。同時に、創造性ある出店支援や、商店街における地域性あふれる魅力を導入することにより、地域商店街の新たな賑わいの創出を実現することを目的とした。

実施期間

平成 22 年 8 月 12 日 → 平成 23 年 2 月 21 日

スケジュール	2010年					2011年		
	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
				ワークショップ「深川あきないはじめ」開催 ● 平成22年11月24日				
				実験店舗クリエイティブラボ ● 平成22年12月26日				
				ワークショップ「DETでコミュニティ起業」開催 ● 平成22年12月26日				
				ワークショップ「POP-UPでクリエイティブ起業」開催 ● 平成23年1月9日				
				ワークショップ「深川で地域とともに新しくはじめよう」開催 ● 平成23年2月18日				

実施内容

対象地域の状況の把握

「地元で商いを始めたい」という意欲的な人材の想いを生かし、地域の活性化と創業・社会起業家を通じて「活動の場」の形成が求められている。

事業内容

深川東京 DET プロジェクト

- クリエイティブラボ（実験店舗）の開設、運営
- ワークショップ・ソーシャルアプリケーション開催
- Ustream による地域情報配信・相談を誘導する WEB サイトの運用

以下の実施フォーメーションによって事業を実施した。

団体名	役割・得意分野など
深川東京 DET プロジェクト	事業企画・実施・地域連携・商店街との交渉・起業人材育成など
深川東京モダン館	人材育成・ワークショップ拠点など
地域商店街	起業・実験トライアル事業者受入れ環境の整備・振興事業の共同展開など
ソーシャルプラットフォーム「DET」	プログラムインキュベーター・人材育成など
横浜コミュニティデザイン・ラボ	事業主体、事業管理など

実施体制

2

育成計画実施における現状

対象地域となる江東区深川地域にはさまざまな人々が移り住み、商店街は期待を寄せている。こうした背景をもとに、新たな担い手が地元の商店街において、新しい事業を始めやすくすることで、より魅力的な地域の活性化を実現する「深川東京 DET*プロジェクト」を展開した。 ※ DET：深川と東京東部をかけた Deep East Tokyo の略称

「実験拠点」の設置

対象となる地域内に、創造性による事業開発チャレンジの場となる「実験拠点」の設置を促した。

環境の整備

実験拠点・深川東京モダン館の2階においてPOP-UP形式（期間限定で新しい事業を実験できる形式）による事業チャレンジが出来る仕組みを整備。12月26日に開催したワークショップで使用実験を行なった後、2月18日より担い手によるチャレンジ出店を開始した。

クリエイティブラボ（実験店舗）の構成

- ・実験カフェ&ギャラリー（開発されたメニューや、商品のアイデアを実現化するための事業トライアルスペース）
- ・テストキッチン（新たな食の開発のスタジオ）
- ・メディアスタジオ（インターネット放送局とビジネスデザインオフィス）

創業のしくみづくりの構築

ソーシャルアプリケーションとして、新たに始める人々が「事業を始めやすく、借りやすく」する、創業のしくみづくりを構築する。

実験店舗「クリエイティブラボ」の設立を通じて、新たな創業支援のしくみをつくる。

創業中間支援を実施

創業および新規事業開始を望む地域の人々の手によって、創業を実現することを促し支援するための「ソーシャルアプリケーション」化した創業中間支援を実施。ワークショップ（4回）開催と随時相談対応の実施、ソーシャルメディアを用いた広報相談窓口を開設した。



講義の様様。

創業インキュベーションのための活動体を組織

創業者および地方から東京でのビジネス展開を行う事業者の創造性を事業として転換する仕組みとしてソーシャルアプリケーションを開発し、クリエイティブラボを企画運営する、創業インキュベーションのための活動体を組織。今回のプログラム終了後も継続した支援と事業運営を実現させる体制をつくった。

ワークショップ

深川地区を中心に集まってきた新しいことをはじめたい人たちが、その新しいことを始められるように応援するプロジェクト「DET」の本格的な起動となったワークショップ。東京の東に位置する深川で、様々な人々が穏やかにチャレンジすることで、東京が、社会が、元気になるプロジェクト。ワークショップの後には創業相談会も開催した。

ワークショップ

平成22年11月24日

深川あきないはじめ

会場:そら庵(高橋商店街)
講師:東海 明子(ブックカフェそら庵店主)
ファシリテーター:岡田 智博(主任研究員)
参加者:19人 **参加費:** 無料

このプロジェクトのキックオフとして、いちはやく深川で営みとして開業した方を講師に招き、DETで商いをする魅力と、商いに至る道を語ってもらうワークショップをはじめた。最初のワークショップは、街の印刷工場をリファインした、ブックカフェ&コミュニティの場「そら庵」で店主の東海明子さんのお話を聞いた。

そら庵のはじまり

「この物件を期間限定で借りてくれる人を探して」と友人から相談された東海明子さん。しかし条件が合わず、自らこの物件を借りてそら庵をオープンすることに。建築家の手による全面改装を経て、2階は雰囲気のあるギャラリー兼事務所として生まれ変わった。



ワークショップ

平成22年12月26日

DET でコミュニティ起業

会場:深川東京モダン館
講師:木村 知昭(ソーシャルエナジー代表)
ファシリテーター:井村 和人(副主任研究員)
参加者: 20人 **参加費:** 無料

世田谷区経堂で喫茶店を営む木村知昭さんが、いかに少ない投資で「ソーシャルエナジーカフェ」をオープンしたか、また、その過程でいかに情報発信を行い、人を巻き込んでいったかを語られた。閉店日の居酒屋の間借りからスタート。オープン前3週間で37人が店づくりに関わった。

Twitterを活用して備品を調達。一口10万円で集めた資本金出資者には、毎年、お菓子で配当。「美味しい社会貢献」をテーマに福祉施設の食品を扱う一方、世の中の社会貢献意欲を高める(本業で社会貢献が実現できるようにする)ことが目的だとも話された。

講演後は、3つのテーブルに分かれて、「深川にあったらいいと思うお店」、「深川につくりたいお店」をテーマに、参加者の皆さんで意見を共有した。



「社員にはどんなスキルや人脈を持った人がいてどんな役割を担っているのか」「起業前後の資金繰りについて」など具体的な質問が寄せられ、実のある内容だった。

多くの参加者に共通していたのは「水辺の町」というイメージを活かしたい、という点だった。



ワークショップ

平成23年1月9日

POP-UP でクリエイティブ起業

会場：そら庵(高橋商店街)
 講師：岡田 真紀(研究員)
 ファシリテーター：岡田 智博(主任研究員)
 参加者：20人 参加費：無料

「POP-UP」をテーマに、クリエイティブな「出会いの場の創造」と「地域と消費者を結ぶ、新たなコミュニティづくりのきっかけ支援」を考えた。講師の岡田真紀さんは、平成11年、故郷金沢で地域活性に繋がるNPO組織を生み出すカフェサロン"salon Sui"を主宰。そして、NPO団体"V.I.V.A."を率い、街中の活性化を唱った大きな野外音楽祭や空きビルのリノベーションを手掛け、金沢21世紀美術館オープン前の金沢のカルチャーシーンを牽引してきた。現在は新業態の仕掛け人として、水都大阪2009での限定カフェ"つかの間レストラン"のプロデュースをはじめ、数多くのクライアントワークを手掛けている。



講師の岡田真紀さん(今回は本プロジェクト研究員)。



講演は、岡田さんのこれまでのプロジェクトの事例を紹介しながら進められた。

POP-UP というビジネスモデル

地価の高いロンドンでは、短期間(週~月単位)でビジネススペースを確保し、限定オープン、イベントを展開するPOP-UPが広く行き渡っている。起動しやすく、仕掛けやすいのが特徴。イギリスで普及しているのは「面白ければやる。面白くなければやめる」英国人気質にあったのだろう。

深川地域のアプリケーションとしてお店を作る

東京の西側に比べて「何でもあり」の雰囲気がある深川。江戸の中では比較的新しく開発され、「新しい江戸」という伝統がある。「もうちょっとお店が欲しい」という声は多い。例えばキッチンなどの設備を用意し、それを利用してもらうことで身軽にお弁当屋さんを…ということも可能だろう。

ワークショップ

平成23年2月18日

深川で地域とともに新しくはじめよう

会場：そら庵(高橋商店街)
 講師：本間 修(森下商店街振興組合理事長)
 ファシリテーター：井村 和人(副主任研究員)
 参加者：9人 参加費：無料

「深川で新しく始める」をテーマに、「深川の達人」として、森下商店街や深川地域で活動をされている本間修さんをお招きした。「地域で長く商売するのは簡単ではない。が、商売を替えてその時々売れるものを扱うというのは昔からある。いろいろな商いをした方がいいが、商人は街との兼ね合いで生きていかないといけない」「起業を志す若者が森下に来た。私は、「商売人として生きる覚悟で君がよそものでなくなるまで頑張れ」と言っている。ただし、深川での商売で一発当てたいならば難しいだろう」… 40代で和菓子屋をはじめ、人の和を大事にする下町流を地で生きる本間さんの話が続いた。



本間さんが興味を持たれている「老舗の商売」について、深川の人たちのさまざまなエピソード、いきざまに話が及び、生の深川にふれるようなお話も聞くことができた。

ワークショップを支える取組み

● POP-UP 型による事業トライアル施設の活用

1月に引き続き、毎週木曜日に Ustream 放送局「モダンチャンネル」で深川東京モダン館を活用。

● POP-UP 型によるトライアルショップの運用

料理人の川田麻美さんがワークショップと相談会を経て、日曜のみ営業のトライアル事業として深川東京モダン館2階にカフェを開業した。毎回異なるメニューを提供できたことは、モダン館側もサービスの向上が行えたとして歓迎された。

3

目標に対する成果（定量・定性面を含む）

高齢化を迎える商店街、町会の会員と、地域に魅力を感じて移り住んだ30歳代。このプロジェクトを通じて、双方の連携が実現。ワークショップやソーシャルメディアを入り口とした相談体制、実験スペースの整備によって形成できるようになった。

新たな商店主候補の検討・調整

商店街のリーダーを講師としたワークショップ受講者の中から、新たな商店主候補が4人創出された。また、ソーシャルメディアによる相談体制から、新たな商店主候補が2人創出された。

一方で、常設の店舗を開設する計画は実現することなく終了した。連携した実施体制を整えるため、地域における店舗オーナーとの間で新しい取り組みへの理解を得るのに時間を要したことなどがその理由に挙げられる。

ソーシャルメディアによる常時相談体制

Twitter、ならびに事業担当者が持つメールアドレスやPR手段を用いて、創業を求める人が相談できる窓口を開設した。今後は、プロジェクトのウェブサイト運用を高めて、常時相談ができる体制を継続していく。



相談を誘導するプロジェクトのウェブサイト。<http://detokyo.org/>

試験的 開業

Ustream による 地域情報配信・PR

担い手候補・行平裕美さんを中心に、エリア情報を紹介する「モダンチャンネル」の放送を開始した（毎週木曜日／深川東京モダン館）。全国の視聴者が対象となるため、コミュニティビジネス＝インターネット放送局としての起業実現をめざす。



「モダンチャンネル」のスタジオ風景。
放送開始からの総視聴者は15,409人（平成23年2月28日現在）を数える。

試験的 開業

トライアル実験カフェ 「にちよう」

フリーランス料理人・白井紀子さんが地域でのカフェを始めた。マーケティングを兼ねて毎週異なる手作りスイーツを用意。メニューや深川地域での集客、サービスなどを考えながら毎週日曜日営業のペースでトライアル中。

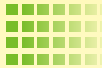


喫茶店の営業許可をモダン館として取得。開業2日間(2/13.20)の来場者は約100人。

4

支援協力機関が事業に果たした役割

深川で、新たな起業をコミュニティベースで始めたいと考える人々の潜在的な高まりを顕在化するとともに、具体的な起業活動へのアクションへと転換していった点は効果的だった。



対象地域、商店街へのヒアリング

新たなスタイルで商店を創業する人々の存在と、彼らの高い意欲を実感した。新しい担い手であり、リーダーでもある「そら庵」の東海さんなどとの連携の基盤を築けたことも大きい。人材育成、新規事業者予備軍の受け入れなどは手探りで協力してきたため、実現できないことがあったことは残念。今後とも、基盤づくりのための推進と発展を深められるようにしていきたい。

(森下商店街振興組合理事長 本間 修さん)



まとめ

深川に生まれた新たな担い手を、地域の仲間としてどう受け入れるか…高齢化する既存組織が抱える課題解決に向けて、相互を結びつけるネットワークが生まれた点は効果的だった。

意欲ある人々を早くから商店街や地域活動の仲間として受け入れ、協働できる基盤をつくりだし、両基盤を一体化して生み出した成果を起点として、今後「新たな担い手の受入れ・実現」を継続して促していけるものとなった。

5

地域、商店街が活性化に向けて果たした役割・活動の報告

商店街の観光案内所であった『深川東京モダン館』を、クリエイティブな活動や起業の実験場として機能させることで、地域、商店街を活性化していく試みが定着することになった。また、起業した先輩格の担い手が、新たな担い手を育成する活動では、既存組織が新しい商店主との結びつきを深め、地域を新たな形で一体化させることを森下地域の商店街で行った。

6

新たな課題とその対策について

ソフト面では、新たな担い手と既存のコミュニティ、そして、いち早く始めた商店主との連携がプロジェクトを通じて深まった。相談窓口として一定の認知も生まれはじめている。このいい流れを継続して街の中で新たな担い手がトライアルできる場の拡充、プログラムの継続化、ソーシャルメディアによる情報発信・窓口づくりを続け、「ときにお客さん」になり「ときに商い」という相互の関係をより広げて、商いの高まりと活性化の芽をより一層育めるようにしたい。



森下商店街振興組合（森下地区）、深川観光協会（門前仲町）